



真宗大谷派 名古屋別院

〒460-0016
名古屋市中区橋2-8-55
TEL 052 (321) 9201
FAX 052 (321) 3184

<http://www.ohigashi.net/>

お東ネット

他力本願って
実は...



他力本願

「他力本願」という語ほど現在誤解して用いられることは少なくありません。手もとの『広辞苑』には、<他力本願>の項に、①阿弥陀如来の本願、②もっぱら他人の力をあてにすること、とあります。よく世間では「自分のことは自分でしなければならぬ、他人の力をあてにするような他力本願では駄目だ」といわれます。もし他力がこのような依頼心を示すのであれば、自力の方が道理にかなっています。このような誤解を危惧されたのか、親鸞聖人が「他力本願」の語を用いることはまれで、ほとんどの場合、「本願他力」と申されます。

他力という語は、中国北魏時代の曇鸞大師の『浄土論註』に見いだされます。菩薩道の遙遠なることを自

覚した大師は、阿弥陀如来の本願力を増上縁（ぞうじょうえん、力強い支え）として菩薩道を完成すべしと説く天親菩薩の『浄土論』に導かれ、『浄土論註』を著しました。曇鸞大師は、この本願力に支えられた易行の念仏の道を、「自力の難行道」に対して、「他力の易行道」と表現したのです。

親鸞聖人は、法然上人の膝元にあった吉水時代に、『浄土論註』を読み込みました。おそらくこのころ上人の許しを得て、これまでの「善信」の名を、天親・曇鸞から一字とって「親鸞」と改めたのでしょう。曇鸞大師への共感のほどが窺われます。

ただ、その他力の思想に心底から頷き、自ら「愚禿親鸞」と名乗ったのは、承元の法難（一二〇七）で越後に配流されてから以降のことではないかと推察されます。北越（現在の新潟）の波風は、人間の一切のはからいを拒否するほど厳しいものがあります。おそらくその体験は、人間の自力の無効なることを聖人に痛切に実感させるとともに、いよいよ他

力の念仏道へと導いたのではないでしょう。

往生は、なにごとにもなにごとにも、凡夫のはからいならず、如来の御ちかいに、まかせまいらせられたればこそ、他力にてはそうらえ。

（『御消息集』広本第五通・『眞宗聖典』567頁）

親鸞聖人は、眞宗の正意をもっぱら他力をいうことばを用いて門侶に説きました。聖人在世の時代から七百五十年という歳月が経ったいま、<他力本願>は、他力即本願力という本来の意味を喪って、単なる「他人まかせ」というような意味に変質してしまいました。あらゆる宗教言語は、時間の流れとともに生命が枯渇してしまいましたが、私たちは、その本来の意味に立ち返って「他力本願」の語で表現される親鸞聖人の教えを生き生きと受け止める必要があると思います。

安富 信哉（大谷大学特任教授）